



責めるな！攻めろ！

私は、中学二年生の時に、自分の最大の欠点に気づけたかな、と思っています。それは、「自分の感情をコントロールできないこと」です。と、文字にするとなかなか伝わりにくいですが、こんな感じですよ。

私は、本当に負けず嫌いで、自分のミスが許せない、ちよつと頭の固い中学生でした。テニスも、力が入りすぎてミスをするタイプです。ちよつと、中学二年生の冬、なかなか勝てない時期が続いたころ、私はなんとミスするたびにラケットで地面をたたくというくせがついてしまします。頑張っているのにうまくいかない悔しさと、周りのみんなができている簡単なこととさえできないむなしさという



んな感情が混ざって抑えられなくなったのだと思います。周りからは「やめなよ、そんなことしても意味ないよ。」と注意されるのですが、自分でも意味ないことなんてわかっているながらももう反射になって、やめられなくなっていました。もちろん、こんな状態で勝てるわけもなくボロボロになっていきました。

そんなとき、練習試合によく来ていた、私の市で一番テニスが強い子と友達になりました。彼女は、審判台の下に身長が収まるほど小さく、全く見た目は強そうではありませんでした(笑)。テニスは中学から始め、運動神経もよくないそうです。一度、なぜそんなに強いのかきいたこ

とがありました。すると、「うーん、目の前の一球に集中することかな。ミスしても、終わった一球を責めるより次の一球に全力かけたほうがいいじゃん。」それを聞いて私は、強くなりたいなら今自分がやっていることは間違っていると気づきました。

ミスしても「ごめん、次取り返すね。」とペアに明るく一言いうだけにとどめ、目の前の一球に集中することを考えました。頭で考えても体はそんなにすぐついてこられませんが、以前より落ち着いて冷静にテニスができるようになりました。感性的になにかにぶつかることも少なくなりました。

さて、みなさんも勉強していて、努力しているのにうまくいかない、勉強をやり始めたけど結果が出ない、もう投げ出したいけど投げ出す勇気もない！なんてもやもやした気持ちを抱えることもあるでしょう。そんな時こそ、まずは目の前の一問に集中してください。やりたくないという感情を周りにぶつけることや、なにかほかの理由をつけられそうなものに逃げることより、落ち着いて冷静に勉強に取り組むことができるようになりますよ。(富田)

「言われぬ一言」

●言葉は時に残酷である。「たった一言」が、その人を傷つけ、ぬぐい去れぬ記憶となったりする。本当は、そんな一言で傷ついてはならぬのだが、強くなるには時間がかかるのが常で、またそのための方法も一般には手に入り難い。私自身も、他人からもらった一言を随分長くひきずって生きてきたが、いつか「どうでもいいや」と思えるようになった。これは、友人のお陰であり、書物のお

陰である。一方で、振り返れば、間違いなく私の一言が相手を傷つけたはずだという場面がいくつかある。無意識の発言はきつと数多となつていよう。複雑な思いである。

●生徒を相手にしていると「傷つき易い」人がたくさんいる。傷ついてはならぬのだが、もつといえど傷つくのは未熟だからなのだが、そうやって押し切るだけでは解決しない。といって私に決定打があるわけでもなく微力ながら本人の成長を祈りつつ、必ずあるはずの出口を探す手助けをするのみである。

●さて、言葉はまた、別の顔があつて、心をほぐし、生きる勇気を与えてくれることもある。「たった一言」が生きることを助けてくれる。私にも、そういう一言がいくつかあつて、つらい時、苦しい時の支えとなつている。勝手に自分が大切にされていた、愛されていた証と思ひ込んでいたかもしれないが、私にとってはかけがえのない言葉である。

●私がいつも心に留めている言葉のひとつは、父が別れの時に残したものである。もう、何回思い出したことだろうもしかしたら、毎日毎日かみしめて生きているのかもしれない。物心ついてからの父の記憶は全くない。二才のときに、父が仕事を求めて大阪へ行ってから、一度も会うことはなかった。詳しくは、「愛の壁」に書いたが、祖父と母と弟との四人暮らしであった。その父が、私が八才の時に、一度だけ帰ってきたことがある。母と父の縁を結んだ仲人さんを入れての話し合いで、三時間余の滞在であった。父が帰ってきた理由、話し合いの中身は省くが、とにかく、その三時間余が記憶に残る



唯一の時間である。話し合いが終わって、また父は大阪へもどることになった。ろくにあいさつも交わせず、淋し気な笑顔(精いっぱい笑顔だったのだ)をもらってお別れ。あの場面で八才の私に、いや父や母や祖父に、弟に何ができただろうか。みんな精一杯だった。しかし、これで終わっていたら、私の人生は少し淋しいものになっていただろう。家の木戸で別れたあと、夜汽車で帰る父をみんなで見送ることとなった。父は、そのことは知らない。父がどの車両にのっているのか分からないが、とにかく、その列車だけは見送りがつかなかった。ガタンゴトン……。ポーツ。ガタンゴトン……。近づく列車を待つ。来た！どこだ！列車が通り過ぎようとしたその瞬間、窓から身を乗り出す人影があつた。

「ケンちゃん！シンちゃん！」私と弟の名を呼ぶ声がかきこえた。父だ！私たちは、必死で手を振った。ガタンゴトン……。ポーツ。ガタンゴトン……。遠ざかる夜汽車の音と、空に満天の星……。大切な時をもらった。そして、父が私たちの名前を呼んだこと。「ケンちゃん！シンちゃん！」この言葉はうれしかった。自分が、弟がそしておそらく母や祖父も父に思われているのだ。私にも父がいるんだ。

●それから二年余。父はこの世を去る。父とのことで私の側に思い残しはたくさんあるが、「ケンちゃん！シンちゃん！」これだけで父は十分のことをしてくれた。感謝感謝である。ほんの少し歯車のかみ合わせが違えば、ずつと一緒に過ごせたかもしれない。しかし、私にとつ



て時の長さはもはやどうでもよいこと。「あの夜」と「父の言葉」は、何物にもかえがたい私の宝物である。(小林)

言葉と姿勢とエクリチュール

●一人称「ボク」を使い続けてきた少年が、ある日「オレ」に変更する。革命的なことである。「ボク」らしかったTシャツや半ズボンを、「オレ」にふさわしいデザインのものに移行したくなる。行動様式も「オレ」にフィットするものの上書きしたくなる。言葉を変えることで、かつての「ボク」からの脱皮は加速し、「オレ」に似合うイケてるものを日夜意識することになる。
●(人間が言葉を作り出したのだが)このように、言葉が我々人間にかなりの作用を与えることがある。言葉が人間を作る。

●言葉の影響力、言葉の作用、言葉の機能をジヤック・デリダやロラン・バルトらはエクリチュールと呼んだ。例えば、甲子園常連校の野球部員の言葉の運用と幼稚園児たちのそれは同じではない。どこかのお料理クラブでの言葉の運用と常勝柔道部のそれが同じであるはずがない。野球部には野球部のエクリチュールが、お料理クラブにはお料理クラブのエクリチュールがある。出典:『寝ながら学べる構造主義』(内田樹)
●内田氏は、この作用を「投獄されるようなもの」と表現する。「我々にできるのは選ぶことだけ。選んだらその後はその言葉に支配される」と。
●言葉の運用に限らず、人間が作り出したものに、その人間の方が支配されてしまう例は少なくない。パソコンを導入して、その有用性・おもしろさに慣れたあと、はたしてそれ無しの生

活に戻れるだろうか。ゲームは？マンガは？スマートフォンは？自分が選び、自分が所有した「モノ」の方に主導権を握られ、「選択者」「所有者」のはずの自分が支配され、振り回されていることは珍しくない。

●有形無形問わず、自分で選んだものに自分が支配されているケースは他にもある。

●授業中の姿勢もその一つ。椅子の背もたれにふんぞり返っているようでは、遠くに見える問題を薄目を開けて「解いているつもり」になっていくだけ。全く本気になれていない。「いや、オレ、こんな姿勢だけどかなり本気つすよ。」という言葉も空しく響く。問題を本気で解いているときは両手が三角形を作り、上体は前傾姿勢になる。



●どちらの姿勢にするかは自分で選べる。もちろん良い影響のある方を選んでほしい。良い影響に支配されているほうが効果性は高いのだから(意思の力でその腰を動かそう！前か？後ろに引くのか？)。

●言葉がその選択者・所有者の人間性の形成にじわじわ影響を与えるように、得点力の形成にじわじわと影響を与えているものは姿勢以外にもまだまだある。だから我々は授業でこうあるのだ。(五日市)

きみときみの親のために

●卒業式の朝から、親の胸はいっぱいだった。いつも無口な親かもしれない。小言しか言わないし、きみのことに無関心ときみにはみえる親かもしれない。きみの進路に不満をもっている親かもしれない。それでも、親はみな、きみの

ことを考えていた。

●きみが、生まれたときのこと、病気になったとき、きみが初めて歩いたとき、つらかった日々のこと……。入園式、入学式、運動会のこと、卒園式、卒業式のこと……。自分自身の子育ての後悔もあるだろうし、これからの心配もあるだろう。きつときみは、遠い記憶から思い出をたぐり寄せていただろうが、それ以上に親は、心のアルバムからきみと自分のページをめくっていたのだ。

●式が始まった瞬間から、親は様々な思いを抱きつつ、ある事に集中した。そう、きみの姿を見つめ、きみの名前がよばれ、きみの返事をきくことに。きみの名前が呼ばれた時、世界は、きみときみの親のために沈黙した。きみの声は親の心を射る。きみが少ししかしこまりはにかんで前に進み、階段を登り、証書を受け取り、再び自分の席にもどるまで。親の眼はずっときみを追った。一つの動きも見逃すまいと……。他の誰がこんなことをするだろう。そして、親の眼はきつと濡れていた。きみの成長を確かめられたからだ。ともかくここまでこられたことを確かめられたからだ。



●きみも大変だっただろうが、親も大変だったのだ。ここまでこられたことは万言をもっても尽くせぬ慶事だ。そのことは気付く。そしてこれから。人が背負う荷物の重さも種類もそれぞれに違うが、みんな幸福になるために生まれてきたのだ。せつかくもらった生命を大事にし、感謝し、学び、自分になれる最高の自分になるのだ。これも理解しろ。

(小林)

新中1準備講座 3月スタートコース開講!

～ 数学と英語の中学内容先取り授業です ～

新課程での英語教科書は単語数も増え表現も難化しています。それに伴い1年生の1学期のテストでは多様な問題が出され、以前のように高得点を取りにくくなっています。そこで、創学舎では中学準備講座を1月から始め、3カ月かけて、どの項目も習熟するよう学習を進めています。

今回、習い事やクラブチームの試合、中学受験等の関係で、これから準備を始めようというお子様のために、3月スタートのコースを開講いたします。3月と春期講習の授業で新中1の英語(be動詞・一般動詞)と数学(正負の数)を扱います。まずはお電話で各教室にお問い合わせください。

小学6年生対象「割合」補習講座 3月中実施

受講料: 1,100円(教材費込) 授業数: 45分×2コマ

「割合」単元は、算数最大の難所の一つで、抽象的な概念把握が必要となるため、苦手とするお子さんが多いところです。

中学校では正負の計算の学習後すぐに文字式・方程式が必要となります。また、「割合」の理解が不十分なままでは、物理の圧力、化学の定比例の法則、地学の湿度など、理科の計算でも苦勞することになります。

本講座では、小学校の「割合」に苦手意識のある現6年生を対象に、割合概念の解説から基本問題の演習までを行います。詳細は各教室の別紙講座案内をご確認ください。